

英語コーパス学会 Newsletter No. 77

Jan. 7, 2014

■会長:堀 正広

■事務局:〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-8 大阪大学大学院言語文化研究科 田畑 智司研究室気付

■TEL:06-6850-5866 ■郵便振替口座:00930-3-195373(英語コーパス学会)

■URL: <http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/> ■e-mail: jaecs.hq@gmail.com ■twitter: @JAECs2012

JAECs
Japan Association for English Corpus Studies

第 39 回大会報告

■概要

英語コーパス学会第 39 回大会は、2013 年 10 月 5 日(土)と 6 日(日)の 2 日間にわたり東北大学川内北キャンパス・マルチメディア教育研究棟にて開催されました。第 39 回大会では、村上征勝先生(同志社大学)の招待講演、阪上辰也先生(広島大学)によるワークショップ、金澤俊吾先生(高知県立大学)の司会進行によるシンポジウム、さらに 15 件の研究発表が行われるなど、東北地区で初めて開催される大会としてとても充実した内容となりました。

まず、大会両日の午前中には、統計解析環境「R」を題材としたワークショップが行われました。初日の第一部「統計解析環境 R による統計処理の基本—検定と視覚化—(初級編)」では、阪上先生が、R のインストール方法を皮切りに、R の諸特徴や基本的な利用法を概説する講義をされた後、ハンズオン講習が開始されました。参加者は、各自持参のラップトップで R を起動してデータを読み込み、ヒストグラム、箱ひげ図、散布図、折れ線グラフなどを描画してデータを視覚化する練習を繰り返しました。併せて、フォントの設定、図の保存形式など、データを美しく効果的に作図するためのカスタマイズ法についても阪上先生に解説していただきました。第一部の締めくくりは、 t 検定と χ^2 二乗検定という二つの手法を通して、統計検定の基礎を学ぶものでした。阪上先生力作のスライドは全部で 137 枚におよび、大変内容の濃い初日のワークショップでした。

二日目、第二部は「統計解析環境 R による言語データの分析(中級編)」と題し、R の基本的な機能を用いて、言語データの分析方法を学ぶことがテーマでした。阪上先生は、日本人英語学習者コーパス「NICE」を題材に、1) コーパスデータの読み込み、2) データの抽出、3) データの分解、4) データの整理、5) 数値データ(総語数、単語頻度など)の算出、6) データの書き出し、という言語データ分析一連の手順を、ハンズオン実

習を交えながら丁寧に解説されました。総語数の計算や、語彙頻度表の作成は、大文字、小文字の統一処理のほか、いくつかの手順を注意深く踏まねばならない上、R に実行させる命令(「関数」、コマンド)の中で、そもそも「単語」とは何か、その定義をユーザーが明示する必要があるなど、R のプログラミングには、一見すると煩瑣で活用の敷居が高く思える面があることは否定できないかもしれません。しかし、自分の手で入力した関数を通して一連のテキスト処理を実行することで、既存のコンコルダンスによるテキスト処理の背後でどのようなアルゴリズムが働いているのかについての理解を深めることができたのではないのでしょうか。言語処理技術の基礎がよく理解できるワークショップでした。尚、阪上先生のワークショップの資料はウェブサイトにて公開されています。<http://sakaue.info/wiki.cgi?page=JAECs2013>

1日目の大会は、まず堀正広会長による開会の挨拶に続き、開催校東北大学初代ディスティングイッシュトプロフェッサーの浅川照夫先生に挨拶のお言葉をいただきました。次に、能勢卓先生(京都聖母女学院短期大学)の司会のもと総会が行われました。まず、会計の小島ますみ先生(岐阜市立女子短期大学)より、2012年度会計報告及び2013年度予算案が示され、いずれも承認されました。大会に出席されなかった会員の皆様には決算書と予算書を同封いたしますので、ご確認ください。

続いて、学会の財政状況改善のために理事会が提案した3つの議案: 1) ニュースレターの電子配信一本化案、2) 2014年度からの理事の年会費値上げ案(¥5,000→¥10,000)、3) 2015年度からの一般会員年会費値上げ案(¥5,000→¥6,000)が審議されました。理事の年会費値上げについては、数名の会員から異議も寄せられましたが、審議の結果、3つの議案いずれも承認されました。総会に続き、学会賞授賞式が行われました。最初に学会賞選考委員長の新井洋一先生(中央大学)から学会賞および奨励賞について審査報告がありました。選考

理由が説明された後、石川慎一郎先生（神戸大学）が2013年度英語コーパス学会賞の受賞者に決定したことが発表されました。授賞式では堀会長から石川先生に賞状、副賞が贈呈されたのに続き、石川先生より受賞の喜びを語るスピーチが行われました。

2013 年度英語コーパス学会賞

受賞者：石川慎一郎氏（神戸大学）

受賞対象：一連のコーパス研究関連著書と、学習者コーパスの構築と研究に関する国際的貢献

2013 年度英語コーパス学会奨励賞

受賞者：該当者なし

第1日の研究発表は2室でのパラレルセッションとなりました。第1室 仁科恭徳先生（明治学院大学）と第2室 新井恭子先生（東洋大学）の司会のもと、計6件の研究発表が行われました。第一日の研究発表セッションの概要は本誌 pp. 2-4 に報告記事を掲載しておりますのでご覧ください。

その後、金澤俊吾先生の司会進行でシンポジウム《コーパスが語ること、コーパスが語らないこと》が行われました。浅川照夫先生（東北大学）、大室剛志先生（名古屋大学）、金澤俊吾先生の三名による議論は言語研究におけるコーパスの有効性や限界をあぶり出すとともに、言語研究の地平を広げるには今後どのようなコーパスが必要かということにも話がおよび、フロアを交えて大変熱の入ったシンポジウムとなりました。（シンポジウムの概要につきましては、pp. 8-9 掲載の報告記事をご参照ください。）

大会1日目終了後の懇親会は、55名の出席がありました。後藤齊先生（東北大学）の司会のもと、会長の堀正広先生の挨拶、そして三浦省五先生（広島大学名誉教授）の乾杯の発声で始まりました。招待講演の村上征勝先生にもご参加いただきました。懇親会では、仙台名物の牛たんや笹かまぼこをはじめ、東北の地酒とともに美味しい料理に舌鼓を打ちながら、研究発表者の方々やシンポジウム講師の先生方、村上先生を囲んでの談話に花が咲きました。また、コーパス言語学今昔物語とでもいうべきエピソードをお話いただいた後藤先生のスピーチなどで大いに盛り上がり、懇親会は午後8時半に終了しました。

2日目は9時半からのワークショップに続いて、高橋薫先生（東京理科大学）の司会のもと、

村上征勝先生による講演《計量的文献研究とコーパス》が行われました。村上先生は、文献の著者の推定、文章の真贋判定、作品成立時期の推定などをめぐる興味深い事例を紹介しながら、国内外の計量的文献研究の歴史と発展について判りやすく紐解き、計量的文献研究におけるコーパス利用の現状と課題について大変刺激に満ちた講演をされました。

2日目の研究発表は3室に分かれて、野口ジュディ先生（武庫川女子大学）、家口美智子先生（摂南大学）と石川慎一郎先生（神戸大学）の司会のもと、各室3件ずつの研究発表が行われ活発な議論が交わされました。（講演ならびに2日目の研究発表の詳細につきましては pp. 5-8 掲載の報告記事をご参照下さい。）

第39回大会は2日間を通して、117名の参加者がありました。初めての東北での開催ということで、何名の方に参加していただけるか、多少の不安を抱えての幕開けでしたが、蓋を開けてみると、その心配は全くの杞憂に過ぎませんでした。質量共に充実したプログラムのお陰で大いに盛会となりました。

最後に、会場の準備などを一手にお引き受けいただいた開催校の岡田毅先生、魅力的な講演・シンポジウム・ワークショップの企画を考案いただいた滝沢直宏先生を始めとする大会企画委員会の諸先生方、会長の堀正広先生、事務局（会計担当）の小島ますみ先生、大会実行委員の新井洋一先生（中央大学）、石井康毅先生（成城大学）、石川保茂先生（京都外国語大学）、梅咲敦子先生（関西学院大学）、園田勝英先生（北海道大学）、高橋薫先生（東京理科大学）、投野由紀夫先生（東京外国語大学）、西村秀夫先生（三重大大学）のご尽力と細部にまで配慮の行き届いたご協力で今大会が盛会に終わったことを喜び、心よりお礼申し上げます。加えて大会実施に協力いただいた東北大学ならびに宮城女学院大学の学生諸氏にもこの紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

■ 研究発表セッションの概要

第1日第1室

Parallel English-Japanese corpus with meaning representations as educational aid

Alastair Butler (JST PRESTO/Tohoku University)

本発表では、英日パラレルコーパスに語彙レベルとフレーズレベルの統語タグを付与し、構文解析を施すことで論理的な意味表記を実現するための方法論、並びに言語学研究や言語教育、機械翻訳におけるその活用の意義と示唆が報告された。

まず、形式意味論ではおなじみの述語論理式 (predicate logic formula) の解釈に関する説明や、日・英文におけるその適用例が報告された。また、学習者のテキスト理解を助長するためには意味のコード化が重要である点や、このような意味表記を分析することで言語間の顕著な違いが明らかになる点が発表者によって強調された。

質疑応答では、論理的な意味表記の具体的な意義や、発表内で取り上げた例文に関する出典などの質問があり、今後の研究の展開についての課題が明らかになった。

仁科恭徳 (明治学院大学)

The Design, Development and Research Potential of the Kansai University Bilingual Essay Corpus

Miho Yamashita (Kansai University)

本発表では、関西大学バイリンガルエッセイコーパス (the Kansai University Bilingual Essay Corpus, 以下 KUBEC) の概要と研究結果の一部が報告された。

KUBEC は、関西大学の外国語学部所属の 175 名、並びに法律学部所属の 25 名から採取した英・日エッセイデータの日本人英語学習者コーパスである。同コーパスは、NICE や ICNALE で採用された計 13 種のトピックに関するエッセイデータから構成される。2012 年時点で、英語で 60 万語、日本語で 140 万語と日本人英語学習者コーパスとしては最大の規模を誇り、被験者の英語学習歴や TOEIC スコアなど書き手の属性情報も収められている。

研究結果の報告では、過剰使用語の種類が KUBEC と他の学習者コーパスとの間で異なっている点が品詞別 (人称代名詞、名詞、動詞、副詞、接続詞) に報告された。特に、日本人が多用すると考えられていた *I* や *think*, *and*, *but*, *because*, *n't* などが、外国語学部の学生のエッセイデータでは多用されておらず、学生が受けた教育内容が英語の産出に反映している点などが発表者によって強調された。

質疑応答では、日本語エッセイが英語エッセイの翻訳として見受けられる点などの質問があり、今後の研究課題が明らかとなった。今後、実施予定であるエラー分析も含め、KUBEC を用いた更なる研究を期待したい。

仁科恭徳 (明治学院大学)

Contrastive Lexical Analysis of Spoken and Written Inter-language Productions by Japanese Learners of English: A Study Based on the Newly Added Spoken Module of the

ICNALE

Shin'ichiro Ishikawa (Kobe University)

本発表では、アジア圏 10 カ国の国際英語学習者作文コーパス (International Corpus Network of Asian Learners of English, 以下 ICNALE) に 2012 年度から新たに追加された発話モジュールの構築手順と、同モジュールを用いた日本人英語学習者の話し言葉・書き言葉間の比較語彙分析の結果が報告された。

まず、ICNALE-S の構築手順に関しては、ICNALE-W とトピックを揃え共通のデータ収集プロトコルを採用することで、書き言葉・話し言葉間における語彙や構文比較の妥当性が確保されていることが報告された。また、書き起こしテキストと音声ファイルの二元的データの公開にあたり、特に音声の周波数変換プログラムを開発・活用することで匿名性を担保したデータ公開を目指している点が発表者によって強調された。分析結果の報告では、熟達度と言語産出の関連性や話し言葉・書き言葉間の高頻度語並びに過剰使用語の違いなどに焦点が置かれた。フロアからは分析の一つとして用いられた対応分析のプロット解釈に関する質問などがあり、活発な議論が行われた。

このプロジェクトが完了すれば、アジア圏各国における英語学習者の話し言葉・書き言葉間の比較中間言語分析が可能となる。今後の ICNALE の動向に注目したい。

仁科恭徳 (明治学院大学)

第 1 日第 2 室

「類義的な動詞不変化構文における不変化詞のアスペクト特性: *up* と *down* を中心に」

大谷直輝 (京都府立大学)

本発表では、反義語である *up* と *down* を含む類義的な動詞不変化詞構文のアスペクト特性を考察することで、*up* には AGENT 指向的な、*down* には PATIENT 指向的な特徴がある点を論じられた。

分析の手順としては、*British National Corpus* から、3 種類の類義的な動詞不変化詞構文 (*burn up/down*, *drink up/down*, *shoot up/down*) を網羅的に収集し、それらの例に対して、(i) 語順 (SV/SVO/受身)、(ii) 目的語の品詞、(iii) 目的語の定性、(iv) 自動詞のタイプ、(v) 意味拡張の 5 つの変数をタグ付けして、文法的・意味的な特徴を調査した。

分析の結果、自動詞用法と受動態において、*up* を含む動詞不変化詞構文が AGENT 指向的であり、*down* を含む動詞不変化詞構文が PATIENT 指向的である点が定量的に示された。すなわち、*down* を含む動詞不変化詞構文は、被行為者が焦点

化された非対格動詞や受動態で用いられる傾向が示された。指向性という意味的な要素を、非能格動詞／非対格動詞や受動態／能動態の分布のような形式的な変数を用いて実証的に行った点は非常に新しい試みである。一方で、他動詞用法における *up* と *down* の指向性の違いの検証や、目的語の定性のような変数がどのように指向性に関わるかに関しては、まだ、明らかにされておらず、今後さらに検討する必要があるとの指摘があった。

本発表では、類義的な動詞不変化詞構文内での *up* と *down* の振舞いだけが考察対象であったが、この指向性の違いが、*up* と *down* が持つ一般的な特徴であるかどうかは興味深い点であり、さらなる検証が望まれる。また、指向性という特徴を用いることで、一般的な不変化詞の完了用法が分析できるかどうかなども興味深い点である。

新井恭子（東洋大学）

Comparing Pair Conversations of Advanced-level Learners with Basic-level Learners: A Corpus-based Analysis from Lexico-Pragmatic Perspectives

Keiko Tsuchiya（東海大学）

本発表は、上級英語学習者と初級英語学習者のペア一組ずつによる会話（各 5 分をデータとし、使用語彙と語用論的観点について、時間軸を付与したコーパスを使用して、比較分析を行った初期的な研究内容の報告が行われた。

東海大学では、全学共通カリキュラムである英語コミュニケーションの授業にて、学習者同士のペアによる会話の評価を行っているが、ペア会話での学習者の話し言葉の実態についての研究は、まだ多くなされていない。本研究は、その実態調査のための研究手法の確立を主な目的とし、以下の 3 点について、小規模なコーパスを用いて分析を行った。(1) 各ペアの会話中で使用される語彙範疇、(2) 学習者の発話の長さ、(3) 「説明」を行う際の使用表現。語彙範疇の調査では、CEFR に基づき開発された the English Vocabulary Profile をもとに、レベルごとの使用語彙数を分析した。結果として、上級学習者のペアでは B1, B2 に相当する語彙の使用がみられたが、初級学習者ペアの語彙の多くは A1, A2 に相当する語彙であることがわかった。発話の長さに関しては、上級学習者ペアはターン回数が少なく、1 回のターンが長い傾向にあり、初級学習者ペアはターン回数が多く、1 回のターンが短いことが分かった。また、上級話者の長いターンを可能にする手段の一つとして、上級学習者ペアでは「説明」表現、特に文と文の論理的な関係性を表す表現(connection)を、初級学習者よりも多く使用しているとの報告があった。

今後、これらの特徴を検証するために、本研究で確立した研究手法を用いて、より規模の大きなコーパスを分析したいとのことであった。

新井恭子（東洋大学）

「The NICTJLE (Japanese Learner English) Corpus の XML 整形形式化とそれを使った習得段階別の語用論的言語特徴の分析」

三浦愛香（東京経済大学）

佐野洋（東京外国語大学）

本発表では、「要求」のスピーチアクトのストラテジーに見られる言語特徴を観察し、その使用の様相を明らかにすることで、日本人英語学習者の口頭による発話能力の一つである語用論的能力の計量調査の結果の報告であった。インタビューテストである SST (The Standard Speaking Test) を書き起したデータから成る The NICT JLE Corpus を使用し、習得段階別及び異なるタスク別に検証している。まず、試験官と受験者の発話の分別や特定のタスクや習熟度にデータの選別を可能にするため、コーパスに付随された「フィラー(F)」などの超言語的な要素のマークアップを整形形式化した。その後、Role-play のタスクにおいて Shopping 及び Train のトピックに取り組んだ受験者データの一部に、先行研究の Blum-Kulka, House & Kasper (1989) などによる coding scheme に基づいて、「要求」のスピーチアクトによる直接性の度合いを示す語用論的機能タグを付与し、主に以下について検証した。Direct（直接的）、Conventionally Indirect（慣例的な表現を用いた間接的）、Indirect（間接的）の 3 つのストラテジーの頻度分布は、習得段階別にどのように異なるのか。また、習熟度が上がるにつれ、External Modification（外的調整）の頻度が上がるのか。

結果、習熟度が上がると「要求」のスピーチアクトは頻度数が上がり、ストラテジーの種類は“Give me this.” のような Direct が初級学習者に多く、“So could you exchange it to the another?” のような Conventionally Indirect は習熟度が上がるにつれ使用頻度が上がった。“It's all you have to do is just exchange.” のような Indirect のストラテジーは、Shopping のタスクでは上昇傾向にあるが、Train ではほとんど変化がないことが観察された。また習熟度が上がるにつれて、主に Grounder（理由）として機能する External Modification の頻度が上昇した。なお、SST では、習得段階によって与えられるタスクの難度が異なり、初級・中級レベルでは品物やチケットの「購入」、上級レベルでは「返品・返金交渉」と問われるスキルが異なる。そのため、頻度上昇の要因が、習得段階を示す特徴であるのかタスクの影響であるか特定することが難

しいことが判明された。習得段階別の語用論的能力の基準特性を特定するには、習熟度に関係なく同じタスクの実施結果を補足する必要があることが示唆された。

新井恭子（東洋大学）

第2日第1室

「日本語母語話者の英語研究論文におけるヘッジ使用」

若松弘子（筑波大学大学院）

本発表では、日本語と英語の言語距離のある母語話者がフォーマルな研究論文中でのヘッジ、つまり表現を和らげる言い回し、の使い方を検証した。ヘッジの例として、Hyland (2005) および Hyland (1998) に依拠し、*may, could, would, might, ought* などの法助動詞、*suggest, assume, seem, tend to* などの動詞、*possible* などの形容詞、*approximately, largely, mainly* などの副詞、*in general* などの句の合計 40 の表現を取り上げた。研究目的は英語母語話者による英語論文と、高熟達度の日本語母語話者の書く英語論文にヘッジ使用の差異はあるかどうかをあきらかにする。分析の手法として、Thomson ISI databases を用いて、被引用件数の高い化学系の論文のうち、英語母語話者と日本語母語話者の論文をそれぞれ 50 本抽出した。論文選択には、筆者の所属機関の所在地および掲載されていた筆者の経歴を参考にした。選択した論文を AntConc で検索できるようにコーパスとして準備した。法助動詞 *may, could, would, might*、動詞 *suppose, predict, tend to, suggest*、形容詞 *possible* については、日本人研究者による化学論文のほうが英語母語話者による化学論文よりも有意に少ない (*might* と *suggest* については $p < .01$ 、それ以外については $p < .001$) 一方で、動詞 *estimate* と副詞 *mainly* の 2 つの表現に限っては、日本人研究者による化学論文よりも英語母語話者による化学論文のほうが有意に多い ($p < .001$) という結果が算出された。これらの結果は、日本人研究者が、より断定的な表現が英語のアカデミックライティングに相応しいと誤解している可能性を示唆すると同時に、高熟達度の日本語母語話者による論文と英語母語話者による論文の比較においても、ヘッジ表現の使い方について有意な差異が生じることを示す。

野口ジュディ（武庫川女子大学）

「教育利用可能なパラレルコーパス検索プラットフォームの構築に向けて」

中條清美（日本大学）

アントニ・ローレンス（早稲田大学）

赤瀬川史朗（Lago 言語研究所）

西垣知佳子（千葉大学）

水本篤（関西大学）

内山将夫（情報通信研究機構）

本研究は Data-Driven Learning (DDL) の各種類のツールやコーパスを一つのプラットフォームとして初級・中級の日本人学習者が利用できるようにするための壮大なプロジェクトである。DDL はコーパス・データを検索し、語彙や文法の学習を発見しながら進めるための手法である。今回のプロジェクトでは、初級学習者でも利用できるような易しいが自然な英語に日本語対訳を付けた教育用英日例文パラレルコーパスを独自に構築中である。また、同じく新しく開発中の DDL 支援システムでは、たとえば論文リポジトリに蓄積したデータをメタ分析することによって DDL の効果検証が可能であること等が示された。DDL プラットフォームには、上述のパラレルコーパスや DDL 支援システムに加えて、4 種類の検索ツール：WebParaNews, AntPConc, GPPS (Grammatical Pattern Profiling System) と LWP (LagoWordProfiler) を搭載する予定にしている。前者の二つのツールはすでに公開中である。WebParaNews はオンラインで新聞ニュースの英語と日本語の訳文を同時に検索でき、AntPConc は独自のコーパスが検索できるソフトウェアである。今後公開予定の GPPS は文法項目ごとに例文のレベル別提示をし、LWP は見出し語ごとに品詞や例文を表示する。このようなプラットフォームは教材開発や個別学習に多に貢献することを期待できる。

野口ジュディ（武庫川女子大学）

「JEFLC Corpus Parallel Version の構築と活用」

投野由紀夫（東京外国語大学）

本発表では英語学習者コーパスのエラー・タグ付与の方法の 1 つとして、原文と添削データとのパラレル・コーパスを準備することでプログラムにより自動タグ付与する、という試みが紹介された。これにより英語学習者のする間違いから習得順序の解明につながるようなデータが得られると期待される。

JEFLC Corpus（日本人中高生 1 万人の英語作文コーパス）から作文 1 万件をイギリス英語母語話者（10 年程度の日本での教授経験者）に文レベル内の局所的エラー（local error）を中心とした添削を依頼した。原文との違いを 3 つのエラーパターンに分類した：

① 原文にあったものが削除された→余剰エラー（addition error）

② 原文にないものが付加された→脱落エラー (omission error)

③ 原文の形が変更された→誤形成エラー (misformation error)

これらのエラーを自動判定する際に、編集距離 (Damerau-Levenshtein distance) のアルゴリズムを用い計算した。その編集距離のプログラムの評価、およびタグ付データをもとに英語力レベルを推定する言語特徴の特定の可能性も示された。このようなシステムが自動化されれば文法指導や教材開発に大きな貢献が期待できる。

野口ジュディ (武庫川女子大学)

第2日第2室

「心理言語学的語彙特性の語彙の豊かさ指標への応用可能性の検討」

石井卓巳 (筑波大学大学院)

従来の語彙の豊かさを測る指標とされている TTR のような多様性 (diversity) を測るものと LFP のような洗練性 (rarity) を測るものがよく知られているが、これらは質的な側面が測れず、低頻度な語彙を数個使っただけで語彙が豊かだという数値が出てしまう欠点がある。よって、本発表はこれらの欠点を補うために、新たに心理言語学的語彙特性の指標を用いることを提案している。MRC Psycholinguistic Database (Wilson, 1988) と WordNet (Princeton University, 2010) がそれぞれ提案している 親密性+具象性+心像性+関連性と多義性+包摂性 (一つ一つの語を英語母語話者が得点化している) という指標を掛けること 8 個の因子を用いて、ICNALE に収録されている日本人 EFL 学習者習熟度別 4 グループと英語母語話者の課題作文における指標を調べている。結果、日本人学習者と英語母語話者は 5 個の因子で弁別できたが、日本人学習者の 4 つのグループでは弁別性が見られなかった。しかしながら、質的側面を測る上では多面的な語彙の豊かさ評価に寄与する可能性があるというのが発表者の主張である。よって、今後はより多様な熟達度の被験者で、またより多様なトピックについて書いた作文で心理言語学的語彙特性の弁別性を調査するべきであるという提案を行った。質疑応答では、心理言語学的語彙特性というまだ一般的には知られていない、先行研究が少ない指標に関する研究だったので、この指標の詳細について質問が出た。

家口美智子 (摂南大学)

「学習モデルとしての教科書用例の改善：使役動詞の記述例に基づく研究」

井上聡 (環太平洋大学)

本研究は、主に日本の高校の教科書における *make/let+O+原型不定詞* と *have/get+O+pp* を取り上げ、これらに対して COCA に見られる英語母語話者の使用頻度と教科書に出てくる頻度に乖離があることと高校の教科書は意味の説明が不足しているものが多いことを指摘した研究である。発表者は教科書は母語話者の実際の言語使用を反映するべきであるという信念を持っており、大きく逸脱したモデルを学習者に提示するべきでないという立場である。調査の結果、教科書のデータが多くなればなるほど母語話者に使用パターンが近づき、また *make+O+原型不定詞* の補部動詞は母語話者のように心理動詞の占有率が上がることが明らかになった。また、文法説明は必修である「コミュニケーション英語 I」にも選択科目である「英語表現 I」の教科書にも十分に見られない。前者は高頻度表現を重視し、後者は複雑な構文を重視している傾向が見られたが、全体としては COCA は「英語表現 I」の教科書に近いことがわかった。フロアからは①教科書において本文に出てきた文が文法事項として重複して出てきているため頻度が上がっているかもしれないという可能性があるのではという質問、②学習指導要領になるべく文法を説明しないほうが良いと書かれているため教科書で明示的な文法説明がないのではないかというコメント、③話言葉と書き言葉で 4 種類の使役動詞のパターンの頻度は異なる可能性があるのではというコメント等が出され、活発な質疑応答となった。

家口美智子 (摂南大学)

「司法英語における類義語をどう活用発信型辞書に記述すべきか」

鳥飼慎一郎 (立教大学)

溜箭将之 (立教大学)

本発表は活用発信型の司法英語辞書を編集するという大きな目的を持ったプロジェクトの一部である。発信することを容易にする辞書の記述としては何が必要かを提示した研究である。まず 2008 年度のアメリカとイギリスの最高裁判例とそれぞれの国のロージャーナルで司法コーパスを構築している。その中で「判決」を意味する *decision, order, judgment, ruling, verdict, decree* を取り上げ、これらの語が全体的に、あるいは英米語で、あるいは最高裁判例・ロージャーナルというレジスターで

それぞれどんな頻度で使われているか、そしてどんな動詞と共起するかを、あるいは一般の辞書で記述されていない形態を取っているときはその形態を、またこれらの単語はどのような歴史的なバックグラウンドを持っているか等を記述することで、従来の辞書では発信することが非常に困難だった司法英語を発信しやすくする辞書の記述例を提示している。また、従来の辞書に記載されている共起する動詞が必ずしも司法コーパスでは使われていなかったことから、司法英語辞書の優位性を主張している。フロアからは、司法コーパスに出て来なかったからといって実際の法廷で使用されないということは考えにくく、法廷の DVD を使用した話し言葉のデータの収集も大切ではないかという点と、発信型の辞書作りの難しさを指摘するコメントが出た。また民事と刑事でこういった単語の使われ方が異なるのではという質問も出た。

家口美智子（摂南大学）

第2日第3室

「基本句を考慮した n -gram の計数」

田中省作（立命館大学）

本発表は、新しい n -gram の定義方法とその応用的価値を例証した発表である。 n -gram は n 語からなる単語連鎖と定義されることが多いが、「自由項（ギャップ）を挟むような不連続な関係を捉えることが難しい」ことや「適切な n が明確ではない」といった問題もある。つまり、任意の n -gram 内に含まれる名詞句や動詞句の長さはコンテキストにより高度に可変的であるため、語の数で一意に切り取ってしまう手法では本来的に同質の言語現象を別扱いにしたり、見落としてしまったりする危険性が高い。

本発表は、これに対し、松原他(2010)の発想を参考として、基本句（句構造を内含しない句）に基づく n -gram の定義を提案している。アイデアの要は、名詞句や動詞句といった「基本句」を1つの語と見立てて n -gram を切り取ろうとするものである。これにより、*take it back*, *take me back*, *take the book back* などはずべて *take NP (NC) back* として同列に扱える。また、動詞句のバリエーションについても同じことがいえる。

発表では京都大学で作られた工学論文コーパスに提案手法を適用し、2-7 gram を取ったところ、 $\langle \text{NP} \rangle$ *can be*, $\langle \text{NP} \rangle$ *have been*, *using* $\langle \text{NP} \rangle$ などが上位にきたことが報告された。これらは一見平易であるが、それゆえ従来の ESP 指導などで見落とされがちなもので、提案手法の潜在的な可能性を示

すものと言える。

発表者の提案により、 n -gram の議論をめぐる問題の多くが整理される可能性が期待される。発表後の質疑では手法の詳細（ n -gram の構成要素単位等）や教育的応用性について意見が交わされた。

石川慎一郎（神戸大学）

「非母語話者の英文に内在する言語系統樹」

永田亮（甲南大学）

言語には、ロマンス語、ゲルマン語、スラブ語といった系統樹が存在することが知られる。各系統樹は基本的な文法構造においてそれぞれ独自性を持つ。本発表は、各国の学習者の英作文を統計的に分類することにより、「母語干渉に起因して、非母語話者の英文には母語の親縁関係が保持される」かどうか、つまりは、学習者の母語が所属する言語系統樹に従う形で、個々の作文データが分類されるかどうかを検証したものである。

発表の前半部では、欧州圏学習者データを多く含む ICLE を用い、品詞／機能語列の分布頻度によってクラスター分析を行なった検証結果が報告された。それによると、各国学習者の作文データは、母語の属する系統樹とほぼ完全に一致する形で分類されたという。発表者は「母語の親縁関係を弁別する因子が言語系統樹を再構築できるほどに強く、品詞／機能語列に転移する」と結論している。後半部ではアジア圏学習者データを含む ICNALE を用いて同様の処理を行った結果、各国データは、母語の類縁性に加え、社会的な英語の位置付けに即する形で、つまりは EFL と ESL 別に分類されたことが報告された。

学習者コーパスの分析の場合、トピックの語彙への影響が問題になることが多いが、発表者は機能語以外のすべての語を品詞コードに置き換えて分析することで見かけの差異を統制した上で、(a) 複合名詞の構成方法、(b) 冠詞の使用、(c) 副詞の位置等を手掛かりに分類を行うことで、より根源的な文法特性を引き出している。発表後の質疑では、手法の詳細のほか、欧州圏とアジア圏の分類の解釈等について意見交換がなされた。

石川慎一郎（神戸大学）

Personalised Statistical Writing Analysis

John Blake（北陸先端科学技術大学院大学）

The presenter discussed how instructors can help Japanese young researchers to improve the lexicogrammatical accuracy and naturalness of their drafts of science papers.

The presenter compiled a set of subject domain cor-

pora focusing on the fields of information science, materials science or knowledge science, and the corpus of the target publications. Then, he compared several lexico-grammatical features seen in learners' drafts and the reference corpora. Special attention was paid to vocabulary fit (keyness of words and phrases), readability (mean sentence length, lexical density, Gunning Fog index and Flesch reading ease), lexical profile (ratios of the words belonging to GSL and AWL), marked usage and grammatical errors (both of which were manually identified by the presenter with a reference to large representative corpora.)

The presenter identified, corrected, and commented on problematic use of words and grammar seen in learners' drafts and presented each of them with "a personalized academic writing analysis," which illustrates not only problematic usage and suggested correction but also the related statistics showing why learners' choice of words and phrases can be regarded inappropriate. Follow-up interviews showed that feedbacks on errors and lexical profile were beneficial for learners. After the presentation, the issues such as the efficacy of the approach and learners' overall responses were discussed.

Shin Ishikawa (神戸大学)

■ 招待講演

「計量的文献研究とコーパス」

村上征勝 (同志社大学)

村上征勝先生には計量的文献研究におけるコーパスの利用の現状と課題について、特に日本語コーパスの課題を中心に講演いただいた。

まず、前置きとして海外での文献の著者の推定、真贋判定、成立時期の推定などを行う計量的文献研究について詳説された。1950 年初頭、メンデンホールによる「シェイクスピア＝ベーコン論争」を扱った研究では、60 万語の単語の長さが分析されたが単語の出現率を用いた分析は行われておらず、1960 年代より文章の数量的性質に統計的推定法や検定法を利用した研究が行われるようになったことを、*The Public Advertiser* 誌に投稿された匿名投書いわゆるジュニアス・レター (the Letters of Junius) の著者推定、「静かなるドン」盗作説、連作論文『連邦主義者』(The Federalist Papers) の著者推定、パトリシア・ハースト誘拐事件の声明文の分析により示された。

日本語となると、1975 年頃まで日本語を扱えるコンピュータはほとんどなかったこともあり、日本語文献の計量的分析は遅れたと述べている。そ

のさらなる理由として、日本語の文献の場合には、文章が分かち書きされていないこと、和漢混合文の存在、漢字・ひらがな・カタカナという文字種類の多様さが処理を困難にしている点で、さらに古文では句点がないため、文の終わりが明瞭でない点などを挙げ、今では日本語の形態素解析ソフトが開発されたことでコーパスを用いた計量的文献研究は盛んになりつつあるとしている。

次に日本語の分析について古典文学と現代文学に分けて説明されている。

前者においては、源氏物語を中心に話を進めている。源氏物語は、紫式部の自筆原稿が存在せず、写本で伝えられてきている。さまざまな写本の不備を訂し、あるべき本文を復原する様々な取り組みが現代に至るまで数百年にわたって着実に積み重ねられてきた。しかしながら、現時点においてもなお研究課題が数多く存在する。そこで、54 巻すべて紫式部によって書かれたかどうかにかかわらず村上先生は着目して計量的観点から分析している。そのため、まず本文のデータベース化からスタートする。同時に 54 巻の文章を単語に分割して、品詞情報・活用形の情報・会話・和歌・地の文のいずれに出現したかの情報などを付加したデータベースとして構築する。分析の結果、宇治十帖と呼ばれる 45 巻から 54 巻までの 10 巻は、それ以前のものとは文体に大きな変化がないものの、「源氏物語」によく出現する言葉のなかで、平均出現率にそれ以前のものとは大きな差があるものが存在することが判明した。これは、直ちに「宇治十帖」の作者が紫式部でないと結論づけることはできないものの、紫式部の文体の変化という結論も否めないものである、という意義のある結論を導くこととなった。

最後に司会者の印象を述べると、古い文書を統計解析するという行いにより、古典、近代文学を即座に概観することができたような不思議体験をしたことと、文学と統計処理という相容れない学問領域がこのような学際的な研究により、神秘的でもあったと感じたことで、機会があれば再度拝聴したいと思った次第である。

参考文献：村上征勝 (2002) 『文化を計る』朝倉書店

高橋薫 (東京理科大学)

■ シンポジウム

「コーパスが語ること、コーパスが語らないこと」

司会 金澤俊吾 (高知県立大学)

本シンポジウムは、頻度効果という視点から扱われることのない言語事実、いわば英文法の周辺部に位置する言語事実注目し、先行研究におけ

る言語表現に関する一般化に対して、新たな言語分析の可能性を提示することを試みた。3人の講師が、英語における前置詞や形容詞、動詞に関わる諸現象をそれぞれ取り上げ、語や句にみられる多義性、諸構文にみられる意味的特徴について検証した。その結果、いずれの言語現象においても、中核的意味から周辺の意味に至るまで、一定の原理に従って連続的な関連性がみられることを明らかにした。

「経路を表す前置詞の意味について」

講師 浅川照夫 (東北大学)

英語の経路前置詞 *across*, *along*, *around* の意味は多義であり、母語話者が直感的に基本的意味と感じているプロトタイプを核として複雑な意味のネットワークを形成している。*along* と *around* では、TR が LM の外側を回る「Outside 意味」と内側を回る「Inside 読み」、および内側の方々を移動する「All-Over 読み」で多義である。*across* でも TR が移動する経路の動線は直線でもよいし、ある程度の制限はあるが LM 内で方々に無方向に広がっていてもよい。*across* の場合、He walked across the tightrope の「Passage 読み」にみられるように、TR が LR 内をどの方向に移動するかは決して一律に固定されるものではない。本発表では、経路前置詞の解釈原理に鳥瞰的視点、近接視点および移動者視点の概念を導入することによって、上記 4 種類の読みが一定の原理に従って連続的に関連付けられることを論じた。

「周辺の構文に見られる変種に関するコーパス資料とその解釈をめぐる」

講師 大室剛志 (名古屋大学)

文法は対等の資格からなる構文の単なる寄せ集めではなく、中核的な構文から周辺の構文へと連続的に多重的に構成されている。また、1つの構文も対等の資格からなるメンバーの単なる寄せ集めではなく、構文を構成するメンバーには、その構文の基本形もあれば変種もある。このような連続的多重的な文法観に立ち、本発表では、英文法の周辺部に属すると思われる構文の変種を取り上げ、それらの変種に関する言語資料として BNC, BoE, Web 等から得られる資料を提示し、コーパス資料からそれらの変種の属性についてどこまで見えてくるのか、またコーパス資料が得られた時にその資料をどのように解釈することにより、それらの変種の理論的な分析につなげていくのかについて論じた。具体的には、同族目的語構文で独立関係節を伴う変種、同族目的語構文と動

作表現構文の受け身、*d'rather* が直接節に従える構文で補文標識の *that* を欠いた変種、同構文で補文の主語位置に対格の名詞を取る変種を取り上げて論じた。

「形容詞の限定用法にみられる修飾関係の多様性について」

講師 金澤俊吾 (高知県立大学)

英語の限定用法の形容詞には多様な修飾関係がみられる。動詞と共起することで初めて、形容詞と修飾対象である目的語名詞との間の修飾関係が成立する場合がある。本発表では、*Have a* 構文 (HAC)(e.g. **(have) a quick/quiet/thoughtful drink*)、軽動詞 *have* と主動詞 *have* が混交して形成される混交構文 (BLC)(e.g. **(have) a quick/quiet/meditative whiskey*) を取り上げ、HAC, BLC にそれぞれ生起する形容詞の分布の違いを検証し、その後、BLC, *drink* が生起する構文を比較し、それぞれの目的語名詞句に生起する形容詞の分布の違いを検証した。

知覚者によって捉えられる事象の精度 (粒度) の違いが、用いられる構文の使い分けに反映されると主張した。Langacker (2008) による詳述性 (specificity) の概念を用いて、詳述性が低い場面を言語化する際には HAC が、詳述性が高い場面を言語化する際には BLC が、それぞれ用いられると提案した。その上で、HAC, BLC にそれぞれ生起する形容詞の分布の違いを説明した。また、BLC を形成する *have* は「口からモノを摂取する」動作を表すのに対し、*drink* は「飲む」動作を詳述する。この詳述性の違いが、それぞれの目的語名詞句に生起する形容詞の分布の違いにみられることを明らかにした。

金澤俊吾 (高知県立大学)

2014 年度春季シンポジウム「私の研究テーマにおけるコーパス利用」開催について

昨春のシンポジウム「私のコーパス利用」に引き続き、2014年4月26日 (土)、同志社大学今出川キャンパスにて標記のシンポジウムを開催いたします。プログラムは以下の予定です。

シンポジウム：

《私の研究テーマにおけるコーパス利用》

司会および「序論」

堀正広 (熊本学園大学) (14:00-14:10)

前半 (14:10-15:10)

1. 地村彰之 (広島大学)

「チョーサーの写本と刊本の比較」

2. 塚本聡（日本大学）
「構文解析コーパスによる時代区分」
3. 梅咲敦子（関西学院大学）
「ディスコース・レジスターから見た言語形式
再考のためのコーパス利用」

休憩 (10分) 15:10-15:20

後半 (15:20-16:20)

4. 石川保茂（京都外国語大学）
「外国語教育における語彙指導とDDL」
5. 石川慎一郎（神戸大学）
「L2学習者研究手段としてのコーパス」
6. 新井洋一（中央大学）
「統語分析，意味分析へのコーパス活用」

休憩 (10分) 16:20-16:30

質疑応答 (30 分) 16:30-17:00

詳細は後日メーリングリストならびに学会ウェブサイトに記載致します。多くの会員のご参加をお待ちしております。

第 40 回大会研究発表者募集

英語コーパス学会第 40 回大会は，2014 年 10 月 4 日（土）および 5 日（日）の 2 日間，熊本学園大学(〒862-8680 熊本県熊本市中央区大江 2-5-1; <https://www.kumagaku.ac.jp>)で開催される運びとなりました。発表を希望される方は，下記の要領に従って e-mail で事務局宛に奮ってご応募下さい。

【分野】本学会にふさわしい，コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた英語研究。

【応募資格】本学会員であること。

【発表方法】発表 20 分，質疑 10 分。

【応募方法】冒頭に題名のみを記し，800-1200 字（参考文献は別）にまとめ，電子メール添付ファイルで送付。電子メール本文に氏名（ふりがな），所属・職名，住所，電話番号，電子メールアドレス明記。

※審査の際，応募者が特定されないよう，事務局が応募書類を加工させていただくことがございます。

【応募締め切り】2013 年 6 月 30 日（月）必着

【採否決定】2013 年 7 月末（予定）

【問合せ】〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8
大阪大学大学院言語文化研究科

田畑智司研究室気付

英語コーパス学会事務局

e-mail: jaecs.hq@gmail.com

新入会員紹介（12 月 25 日現在 S は学生会員）

Butler, Alastair	JST PRESTO/東北大学
井口 智彰	広島大学大学院 S
石井 卓巳	筑波大学大学院 S
佐野 洋	東京外国語大学
嶋田 和成	東京経済大学
高橋 有加	
溜箭 将之	立教大学
土屋 慶子	東海大学
野中 大輔	東京大学大学院 S
蓬萊 朋子	信州大学
細井 俊克	（独）国立健康栄養研究所

会誌『英語コーパス研究』第 22 号論文投稿募集について

『英語コーパス研究』第 21 号（2014 年刊行）について報告いたします。2013 年 11 月末に締め切りの，本年の会誌への投稿数は，研究論文 7 点，研究ノート 1 点でした。現在，編集委員および論文査読委員による厳正な査読審査が行われております。『英語コーパス研究』は 11 月末日が投稿の締め切りです。本年度投稿に至らなかった論文等をお持ちの会員の方々は，次年度（第 22 号）への投稿へ向けて是非ともご検討をお願いいたします。研究論文，研究ノートのみならず，書評やコーパス紹介，ソフトウェアレビュー，実践報告なども受け付けております。学術的水準も高く，かつ多くの会員諸氏にとって有益な情報をもたらす会誌としたいと願っております。多くの投稿をお待ちしております。

続きまして，『英語コーパス研究』第 22 号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」，「研究ノート」，「実践報告」
2. 「書評」，「コーパス紹介」，「ソフトウェア紹介」，「海外レポート」，「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【投稿申込締め切り】2014 年 9 月 30 日（火）

氏名，所属，原稿の種類とタイトル，連絡先住所を下記の原稿提出先まで電子メールにてお知らせください。メール件名は『『英語コーパス研究』第 22 号投稿申込』とし，メール本体に上記の情報を箇条書きで記入ください。

【原稿提出締め切り】2014 年 11 月 30 日（日）

電子メール添付にて提出してください。提出方法等についての詳細は学会 Web ページの投稿規定

<http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/Guidelines/ECS>

_SGuide-j.pdfを参照してください。

※なお、本文や図表の体裁および参考文献目録の表記の統一などに関して第20号を参照の上、十分にご配慮ください。

【問い合わせ先・原稿提出先】

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41

東北大学・大学院国際文化研究科 岡田毅

TEL: 022-795-7632 FAX: 022-795-7632

e-mail: t-okada@intcul.tohoku.ac.jp

【原稿の長さ】(厳守ください)

1. 研究論文

和文：A4 サイズ 1 ページあたり 35 字×30 行，17 枚以内 (10.5 ポイント(MS 明朝)使用)

英文：A4 サイズ 1 ページあたり 70 ストローク×35 行，17 枚以内 (10.5 ポイント(Times New Roman)使用)

※いずれも Abstract (英文)，図表，注，参考文献目録，付録を含む

2. 研究ノート

研究論文の書式と同様で，12 枚以内

※いずれも Abstract (英文)，図表，注，参考文献目録，付録を含む

3. その他

研究論文の半分以下

【書式】

第20号所収の論文を参考にしてください。詳細は上記の学会 Web ページで確認ください。

【採用通知】2015 年 1 月

【刊行予定】2015 年 5 月下旬

※なお、投稿申込（9 月末締切）への応募の有無に関わらず，11 月末の原稿締め切りまでに投稿頂ければ，会誌への投稿は可能です。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
岡田毅（東北大学）

英語コーパス学会賞・奨励賞の募集について

2014年度英語コーパス学会賞および奨励賞を募集いたします。学会賞は，コーパス利用を中心に据えた英語研究・教育，あるいはその関連領域の研究や学会活動などに，多大な貢献が認められる業績に対して贈られる賞です。今までに，著書，一連の複数論文，コーパス分析ツールの開発などの業績に対して授与されています。

同時に，特に若手研究者を対象に，奨励賞も募集します。こちらは，若手研究者の優れた業績に報いるために設けられた賞です。

どちらの賞の締め切りも，6 月末日です。奮ってご応募ください。

【対象】

学会賞は，英語コーパス学会の目的に照らし，英語コーパスに関わる特に優れた研究業績（著書，一連の複数論文，コーパス分析ツールの開発，その他）をあげた学会員（個人またはグループ）とする。

奨励賞は，39 歳以下で，英語コーパスに関わる優れた研究業績（著書，学会誌『英語コーパス研究』に掲載された論文 1 編以上，コーパス分析ツールの開発，その他）をあげた学会員個人を対象とする。

【応募方法】自薦，他薦を問わない。

【提出書類】

1) 推薦理由書（所定の書式 [Word, PDF] による）。以下のリンクからダウンロード可能。

Word 版 http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/Admin/Award/nomination_form-j.doc

PDF 版 http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/Admin/Award/nomination_form-j.pdf

2) 単行本の場合：事務局で用意するので送付は不要。論文の場合：現物またはコピーを送付。

※ネットから自由にダウンロードできるものは，ダウンロード先の明示のみでよい。

※奨励賞対象が論文の場合は，『英語コーパス研究』に限定されるので，送付は不要。

【提出先】

〒560-6643 大阪府豊中市待兼山町 1-8 大阪大学
大学院言語文化研究科 田畑 智司研究室気付

JAECs 事務局

E-mail: jaecs.hq@gmail.com

【応募期限】2014 年 6 月 30 日（月）

【審査結果の報告および表彰式】2014 年度年次大会（熊本学園大学 10 月 4 日～5 日）

学会賞選考委員会委員長
新井 洋一（中央大学）

東支部活動予定

東支部では、以下の通り、2014年3月8日（土）に講習会・研究発表会を行うよう企画しました。

東支部 講習会・研究発表会

【日時】 2014年3月8日(土) 10:30～17:00
(終了予定)

【場所】 日本大学文理学部（東京都世田谷区）
(京王線下高井戸あるいは桜上水下車徒歩8分)
[<http://www.chs.nihon-u.ac.jp/access/>]

【内容】

10:30 ～ 12:30 講習会 [図書館3階 ML1教室]

13:30 ～ 17:00 研究発表会 [3号館3203教室]

【参加費】 会員無料・非会員1,000円

講習会は、新井洋一（中央大学）講師による「BYU コーパス入門」を行います。大規模コーパスでありながら簡便に検索でき、またアナライザー機能を有するなど多機能なコーパス検索システムである BYU コーパスの講習会です。初心者からある程度利用経験者を対象とした講習会です。

研究発表、講習会とも東支部 塚本聡
(mailto:jaecs.eastern@gmail.com)にて受付をしています。申し込み方法などの詳細は東支部 HP
<http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/jaecse/whatsnew.html>

をご覧ください。多くの会員の応募、参加をお待ちしています。

東支部長
塚本聡（日本大学）

総会の決定事項について

第39回大会の報告欄でもふれましたが、10月4日（金）開催の理事会の決議に基づき、10月5日（土）に開催された総会に以下の議案が付議され、いずれも審議の結果承認されました。重要な決定事項ですので改めて明記してお知らせいたします。

■ニュースレターの電子配信一本化について

これまで電子版に加えて、メール便により送付を行っていたニュースレターの紙媒体での刊行を終了し、次号（第78号）から電子配信のみに切り替えることが決まりました。配信は学会メーリングリストならびに学会ウェブサイトを通じてダウンロードアドレスを通知する方式を取る予定です。つきましては、メーリングリストを非受信に

していच्छる会員各位におかれましては、メーリングリストへ加入いただくか、随時学会ウェブサイトをご覧いただきますようお願いいたします。メーリングリスト新規加入は事務局(jaecs.hq@gmail.com)あて電子メールにてお申込下さい。

■理事の年会費値上げについて

2014 年度より理事の年会費を増額し ¥10,000 とする案が承認されました。

■一般会員の年会費値上げについて

2015 年度より一般会員の年会費が ¥1,000 増額されて、¥6,000 となることになりました。一般会員の皆様のご負担を大きくすることは大変心苦しいことではありますが、何卒ご理解とご協力いただきますようお願いいたします。なお、学生会員につきましては現行通り ¥3,000 のまま変更ありません。

■今後の大会日程と開催校

- (1) 第40回大会は2014年10月4～5日に熊本学園大学（熊本市）において開催されることが決まりました。当学会の会場は初めて関門海峡を渡ることになります。
- (2) 第41回大会は2015年10月初旬に愛知大学（名古屋市）にて開催する方向で現在調整を行っています。

■事務局より会員の皆様へのお願い

近年顕著に増加の一途を辿り、業務の妨げとなっているスパムメール対策の一環として事務局でもスパムフィルタを導入しております。しかしながら、その副作用として時折会員の方からのメッセージがフィルタで誤判別されてしまい、事務局に届かないという由々しきケースも発生しております。会員の皆様にはご不便をお掛けして誠に申し訳ございません。もし一週間以上返信がない場合は、フィルタの誤判別により受信できていない可能性がありますので、可能でしたら .ac.jp / .edu / .org(.jp)などのドメインの電子メールアドレスより再度送信いただけますとありがたく存じます。これまでの例では @yahoo.co.jp ドメインからのメッセージが誤判別されることが何度かありました。普段当該ドメインをお使いの会員の皆様にはご迷惑おかけして大変心苦しく存じますが、なにとぞご斟酌、ご海容下さいますようお願い申し上げます。

◇ 寄贈刊行物の紹介

以下の図書の寄贈がありました。心より御礼申し上げます。

投野由紀夫, 金子朝子, 杉浦正利, 和泉絵美 編著
(2013)『英語学習者コーパス活用ハンドブック』
(大修館書店)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

FORUM

◆ 講演「コーパス研究入門:基本と注意点」に参加して

高橋薫 (東京理科大学)

去る7月13日に名古屋大学国際開発研究科のオープンキャンパスで大名力氏による講演「コーパス研究入門:基本と注意点」が行われた。全体構成は、1) コーパス検索の基本、2) コーパスデータに基づく仮説の検証、3) 現在、コーパス利用が進んでいる理由、4) コーパスデータから得られる情報、5) 言語現象の種類とコーパスからの情報の得やすさ、6) コーパス利用の注意点、からなり、基本となる点をカバーしていること、また、オープンキャンパス参加者を主たる対象としているためコーパスに関する知識を前提としない内容となっていることから、これからコーパスを活用して言語研究を始めようとする初心者にとって有益な内容となっている。しかし実はそればかりではなく、既に何年にもわたりコーパスを利用してきた研究者ですら見落としている、あるいは軽視しているいくつかの事柄について説得性をもって解説しており、本学会会員にも有益であると思うので、以下にそれぞれの項目について詳説する。

1)では、副詞 *wildly* が修飾する形容詞を調べることから始め、KWIC 表示およびソートの機能、MI score 等の共起性の指標を利用し *wildly* の用法について解説し、語の用法を調べるのにはコーパスの利用が有効であること、特に大規模な成人母語話者コーパスにおいて頻度・指標が上位のものは、話題・個人差等の偏りの解消・中立化により言語的特徴が現れやすく、共起関係等、語の用法に関する研究においてコーパスが威力を発揮するツールであることを示す。

各語の用法と違い、英文法は研究し尽くされており、さらに研究する余地はないと考える人もい

るかもしれないが、「実はわかっていないことがたくさんある」と注意を促し、文法研究においてもコーパスが有用なツールとなるとし、次の2)で実例を挙げ詳しく説明する。

2)「コーパスデータに基づく仮説の検証」では、(事実観察+理論)→仮説→予測→検証という一連の流れのなかで、コーパスデータを用いた仮説検証の方法について説明する。具体的には、伝統文法の頃から問題とされてきた、一見不定冠詞が複数名詞を修飾しているように見える *a beautiful two weeks* タイプの名詞句を取り上げ、*a scant two inches*, *a humid 80 degrees*, *an inherently more amazing five Wimbledon titles* など多数の例を挙げ、一部の形容詞の特異な用法ではなく一般的な扱いが必要であることを示した上で、統語構造に関する2つの仮説をコーパスデータで検証してみせ、文法研究におけるコーパス利用の有用性を示す。

3)の「現在、コーパス利用が進んでいる理由」では、以前はコーパスの利用があまり盛んでなかった理由として、一般に利用可能な大規模コーパスがなく、コンピューターも普及しておらず、利用環境に大きな制限があったこと、また、1950～80年代に利用可能であった100万語規模のコーパスでは文法的該当例、特にコンピューターで自動抽出可能なものが非常に少なく(この部分については、巧みに図解している)、文法研究に必要なデータが得にくかったことを挙げている。その後、状況は大きく変わり現在に至っているが、現在でも量・種類ともに十分というわけではないことを指摘する。

4)の「コーパスデータから得られる情報」では、コーパスから情報を読み取るの意味、コーパスに収録される情報について述べている。韓国語テキストのKWIC表示を例に、知らない言語でも、文字の異同に基づくデータの並べ替え、文字列の頻度、文字列同士の共起頻度の計算、計算式に従い共起強度等を計算することは可能であること、コンピューターが行っているのは、正確かつ高速ではあるが、こういう類いの処理であり、意味や統語情報等を扱っているわけではないこと、したがって、“コーパスデータから得られた情報”とは、実はその言語の知識を持った分析者自身が情報を補ったり取捨選択したりした結果であり、情報のすべてがコーパスそのものにあるものではないことを示し、コーパスは、ある面で豊かな情報を提供してくれるが、他の面では乏しい情報しか持たないものであることを認識して利用する必要があることを指摘する。

5)の「言語現象の種類とコーパスからの情報の

得やすさ」では、現在ある多くのコーパスでは、要素（文字、綴り、単語、レマ、品詞）の異同と線形順序から機械的操作により得られる情報に基づき抽出可能な言語現象（の側面）についてはデータが得やすいが、意味的修飾関係、尺度、カテゴリー化など「意味」が関わる表現は（直接指定可能な語彙項目（の連続）をキーにして検索可能なものを除き）検索が困難であることを指摘する。このように言語現象にはコーパスで検索しやすいもの、しにくいものがあるが、言語研究の対象は言語、コーパスは道具であり、コーパスで研究できるものに対象を絞るのは本末転倒であり、コーパスで十分なデータが得られない場合は、他のデータを利用する必要がある、さらに中・長期的には、コーパスに付与する情報を見直し、分析ツール・手法の開発・改良を進めていき、コーパスから得られるデータを量的にも質的にも拡大・充実していくことも重要であると述べる。

6)の「コーパス利用の注意点」では、コーパスは便利だが利用には注意も必要であり、「簡単に使える」は危ないと述べ、コーパスに準ずるものとして利用されることも多いサーチエンジンによる用例検索を例として、具体的な問題点に触れている。例えば、定性的分析では、例として使用するものは1つ1つ目で見て確認するので、問題があれば気づきやすいが、定量的分析はヒット数に目が行きやすく問題点がないか確認を怠る危険性がある。ヒット数のなかには明らかに頻度に対応していないと考えられるケースがあるので、ヒット数を頻度に準じて扱う人はそう見なしてよい根拠を示す必要がある。再考すべき事は、ヒット数は何を意味するのか、どのような処理をしているのか、検索対象は何か、ヒット数は分析にどんな意味を持つのか、という点である。妥当性の検討なしにヒット数が使われているのが現状であり、程度の差はあれ狭義のコーパスについても同様の問題が生じている。

最後に締めくくりとして、コーパスの有効活用のためには、適切な方法によりデータを抽出し、データにあるパターンを見出し、適切な解釈を与える能力が必要であると述べている。さらに、研究者の言語感覚や理論による予測、解釈が重要な働きを果たすため、直接的な事実観察は重要であり、表面的なパターンの記述に終わらないためには理論が不可欠であると結んでいる。

さて、筆者の印象として、所々ウィットに富んだ関連分野の解説を織り交ぜながら、言語学のさまざまな知識を駆使した大変含蓄のある内容で、提示画面は180頁にも及ぶ詳細なもので提示され

た例文数も膨大であった。冒頭でも述べたようにコーパスを研究に利用する者にとって身につまされる指摘が多々あり、同時に、上記の観点から過去の論文を再検討することにより、より信頼性・妥当性の高い研究とすることができ、ひいてはコーパス研究全体の質の向上にも資するものだと感じた。

大名氏には JAECS の大会でこれまでも何度か講演・ワークショップ等でご尽力いただいているが、本大会で再度、初心者向けというこのお題でご講演いただき、コーパス研究者も今一度、初心に戻る心境で拝聴する価値は十分あると感じた次第である。

◆ PALA (Poetics and Linguistics Association) 年次大会参加報告

西尾美由紀（近畿大学）

PALA は文体論、言語学、認知科学、コーパス言語学、語用論などそれに関連する様々な分野の研究者から組織されており、毎年行われる年次大会には50カ国に及ぶ国々から研究者が集まる。最近の発表テーマは narratology, literariness, literary linguistics, stylistics and pedagogy, critical discourse analysis, gender and writing, literary translation studies, linguistics and philosophy, metaphor, cognition, pragmatics, text linguistics, corpus stylistics と多岐に渡っている。

今年度の年次大会「PALA 2013」は7月31日-8月4日の日程で、ドイツのハイデルベルク大学で開催された。今年度の統一テーマは“Mobile Stylistics”であった。このテーマで4日間に渡って6つの Plenary speeches が行われた。Malga Munkelt “Couples and Competitors in Shakespeare: Disparity, Performative Approximation, and (EX)Change,” Monika Fludernik “Collectivities and Plurality in Narrative,” Ingo H. Warnke “A Report on A Report on the City—On Promiscuous Genres as Zones in Betwixt, or: Mobility is in the Liminal Sphere,” Nina Nørgaard “Stylistic mobility—moving beyond language,” Dan McIntyre “Subtitling and characterisation,” Mark Turner “The style of network news.”

“Mobile Stylistics”に関連する発表では、コンピュータを利用するコミュニケーションツールである Facebook や Twitter のコメントからコーパスを編纂し、語用論的観点から分析した研究発表は興味深かった。また、“Mobile Stylistics”以外の発表も多く、特にシェイクスピア、ディケンズ、ヴァージニア・ウルフなど作家の言語研究も多

かった。様々な分野の研究者から質問やコメントをいただけるので、特に若手研究者にとっては研究を発展させる上でも非常に有益である。

今年の参加者は174名、そのうち日本人が17名であった。以下は今回の日本人の英語コーパス学会会員の発表である。(アルファベット順)：

Arai, Kyoko (Toyo Univ.) “The Mobility of Information: Seeing Communication as a Movement of Information—from relevance theoretic perspective,” Koguchi, Keisuke (Yasuda Women’s University) “Stylistic Use of Participant Items in *A Tale of Two Cities*,” Nose, Takuji (Kyoto Seibo College) “An Analysis of the Malicious Dialogues Between the Mannon Ladies in Eugene O’Neill’s *Mourning Becomes Electra*,” Oku, Soichiro (Kanto Gakuin University) “A Stylistic Comparison of Grimm’s Fairy Tales—with reference to pedagogical tools—,” Sera, Haruko (University of Hyogo) “Depictions of emotions in *Snow Country*: A semantic analysis,” Tabata, Tomoji (University of Osaka) “Stylometry of collaborative writings: Dickens, Collins, and their collaborations,” Nishio, Miyuki (Kinki University) “Dickens’s Artistry of the Reporting Verb.”

写真は Conference Dinner 前、ハイデルベルク城にて。右から二人目は Mick Short 先生。英語コーパス学会員は右から 3 人目より、新井恭子先生、能勢卓先生、田畑智司先生、お一人おいて、瀬良晴子先生、高口圭輔先生、左端が筆者。

来年度は University of Maribor, Slovenia で “Everybody’s Got Style! Testing the boundaries of contemporary stylistics” というテーマで 7 月 16–20 日の日程で開催される予定である。

※ PALA については URL: <http://www.pala.ac.uk/> を参照。

※ この報告については、大阪大谷大学浮網茂信先生にご協力いただいた。



2014 年 1 月 7 日発行

編集・発行 英語コーパス学会
会長 堀 正広
事務局 〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8
大阪大学大学院言語文化研究科
田畑 智司研究室気付
電話：06-6850-5866
e-mail: jaecs.hq@gmail.com twitter: @JAECS2012
URL: <http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/>
